

進路指導とソーシャルワークについての一考察

秋山 博介

生活文化学科 社会福祉研究室

A Study of Social Work and Abstract Career Counseling

Hiroyuki AKIYAMA

Department of Human Sciences and Arts, Jissen Women's University

Our society, today, is one that is full of social pathology. As individuals, we are overwhelmed with issues of “truancy,” “bullying,” “intense stress of taking exams,” “withdrawal,” “depression,” and “lethargy.” At schools, we face “endless criticism, aspersions, and favoritism by teachers,” and at home, we face “an increase in domestic violence and an expansion in its range of types; that is, not only is the husband abusing the wife but also there are cases of the wife abusing the husband.”

A teacher's effort alone is insufficient to deal with children's problems involving their parents' “divorce,” “in-home divorce (marriage that has broken down but where the wife and husband still live together without getting a divorce),” and other adverse effects caused by marital discord. It is necessary to ask for support from a third party—namely, a social worker.

During the course of career counseling, it is the social worker who sets the stage and prepares the youth to reflect on their dreams and aspirations from when they were younger, and on how to come up with solutions using self-leadership skills as they become adolescents.

When it comes to the issue of effective career counseling, they are more desirable than school counselors since they have the ability to capt.

Key words : Social pathology (社会病理), truancy (不登校), bullying (いじめ), depression (うつ病), socialwork (ソーシャルワーク), divorce (離婚), lethargy (無気力)

はじめに

現代社会は、様々な社会病理に溢れた社会である。例えば、学校のなかでも「不登校」、「いじめ」、「受験」、「就職」、「教員による児童・生徒に対するいじめ」、「特定の子どもに対する批判や中傷及び特定の子どもにたいするひいき」などの教員問題も陰湿化しており、一人の担任や生徒指導の教員だけでは問題を抱え込み問題解決することが難しくなっている。個人の問題の領域では、「精神的問題」、「様々なストレス」、「親との関係不全」、「自信のなさ」、「不安」、「学力不足」、「精神的問題（鬱・ひきこもり・自虐・など）」が増加している。

家族の領域では、価値観の相違や社会の潮流に振り回されながら、家族の関係が疎遠になり、コミュニケーションが希薄になることによって、「家族の不和」、「夫

婦の不和」、「家庭内離婚」や「離婚」などの問題が重篤化している。暴力に関しても「DV(妻に対する暴力・夫に対する暴力・お年寄りに対する暴力など)」の家庭の問題が顕在化・多岐化している。

地域的領域では、「子どもに対する虐待」、「子どもの自己自立能力の阻害」、「地域の個人に対する無関心」「情報の見えづらさ」などという子ども・親・学校・地域・社会のベクトル上に起こる阻害などが横行している。そして、未だに地域社会の思想は、少数派に眼を向けることなく、大多数に眼を向ける社会である(大多数派の原理)。

そこで、ソーシャルワーカーは、児童・生徒・教員が協働して問題解決や適切な各々の進路を提示したり方向性をアドバイスしたりして生徒・児童の進むべき道を調整し、後方からの支援と弱者に対する権利を守

るために行動する。この活動は、地域の人々と共働して、お互いに理解を高めることに重きを置く（結果ではなくプロセス重視）。個人・家族にとって地域理解が高まらないとなかなか価値観を共有することは困難になる。また、情報や支援がないと生徒・児童は、目の前ばかり気にし、その後の将来の生活を実現させるための前段階としての進路に対しても積極的に動けない。しかも自己同一性の確立に失敗した児童・生徒は、問題が内部化するか外部化する（内部化すると➡（ひきこもり・自傷行為・拒食・過食など conflict ➡ aggression 図式内面化が起こる）外部化すると他者を傷つけたり、いらいらも募り、攻撃性を外にむけたりしがちである➡（万引き・非行・無力化・暴力・無意味な反乱など）が出やすい。そこで第三者であるソーシャルワーカーが生徒・児童に対して向き合い、様々なシーンである程度適応できるように訓練をし、適応を促す。

つまりは、ある程度の様々な刺激に対して全体理解をし、解決するための自己適応能力が進まないとならない。また、集団のなかで児童・生徒本人が社会や地域に対して、寄り添いや地域理解がないと個々人で各々が一緒に生活しようと思っても価値観や生活手段が相違するため適応することが困難になる。

地域では、経済の問題としての現代型貧困（生活保護の激増）、「環境問題（ゴミ問題や汚染の問題）」、「学校統合と教育縮小問題（十分な教育が不可能に）」、「高齢者の増加と少子化問題（年金問題・医療費の拡大）」、「企業の縮小による経済状況の悪化（社会経済の景気失速）」と「企業経営悪化によるリストラ（ワーキングプアや生活困難者増大）」、「大都市及び地方の景気の悪化（地域格差・給料格差・サービス格差など）」、「弱者に対するラベリング（弱い物いじめ・弱者に対する注目がなくなる）」などがなされる。そこで十分な対処をするためには教員だけでは少なすぎるため、ソーシャルワーカーなどの連携人脈や組織を活用し、弱者を理解してもらうために弱者を全面に押し出す思想であるメインストリーミング（mainstreaming）を行い、大多数派の人々に少数派である弱者を受け入れてもらい、大多数派に弱者の弱い点を理解してもらい、より人にやさしい社会の普遍化を目指して、地域の人々に少数派の人々と一緒になって相互理解してもらい、生活改良運動や地域改善のためのボランティア活動や支援活動に参加してもらうことを主眼とする。

弱者が認められることによって、一般社会の中で弱者が働ける土壌を構築し、他方でソーシャルワーカー等の専門家にも教育委員会などの学校関係機関との連携を創造することによって、地域社会との連携を創り、仕事ができるように既存の資源活用や必要と考えられるが、存在しない必要なニーズに対しては新たに資源を創る。

また、児童・生徒が仕事や進路を実体験できるようにボランティア活動創造やインターンシップなどを数多く手掛けて頂き、生徒・児童が本人の将来にむけての方向性のある仕事を事前に体験できる場所や資源を発掘する役目をワーカーは担う（アウトリーチ）、また、社会に飛び立つ前のソフトランディングとして公的な社会的サービスや民間のサービスを地域共働で創ったり、実体験できる場所を増加させ、社会の潮流に合わせてマスメディアなども動き、ソーシャルワーカーと共に、次世代の進路に必要な社会資源を発掘したり、結びつける役割を行うことで児童・生徒の進路を多岐化させる（linkage）つまり、より児童・生徒の選択肢を多岐化させることに重点を置く。

1. ソーシャルワーカーが考える根本思想と生徒・児童に対する社会的潮流

ワーカーが考える思考には、ノーマライゼーション（normalization）やメインストリーミング（mainstreaming）がある。この考え方を地域や児童・生徒に適用させる利点は、地域に住んでいる人は、殆どにおいて自分が見たものを優先する自分の価値観や興味のあるものを認め、そうでないものは、無視したり自分の意識から除外したり、迫害する。殆どの人間は、自分の興味領域以外は、どちらかというと無知であり、その後自分が知っていたつもりである認知する領域でも誤った知識の蓄積や大多数派から攻撃されると自信がなくなり、不安に陥り、その上、負の自分の噂が流れると自分でどのように進んでいけばよいのか自己理解できなくなり、しかもそれが少数派であった場合、自分の考え方が他の人より正確なのかを迷って益々不安になる児童・生徒が続出し、最終的には自分で人生の方向性を決められなくなり、結局、大多数派の意見に流され、右往左往することとなる。個性のある少数派の人は、孤独・無感動により児童・生徒が思ったように人生を前進することが困難になる。同時に全体社会は、地域

社会の居住者達に対してあまりにも無関心すぎ、強いでは社会政策の不便さを感じさせられたり、個人主義によって、弱者の動向や貧困の現状に対して無理解、無関心など様々な「無（無関心・無意識・無常）など」が溢れていることに気付かされる。また「ふ」（不信・負担・不満・不安）も拍車をかけ、社会全体に何だかわからない雰囲気が醸し出され、その結果、ますます弱者は、極度にラベリングされて、弱者である児童・生徒はどうしてよいかわからず、失意のどん底に追いつめられる。そこで、まず少数派を全面に押し出して、（mainstreaming）で社会と交流したりする。みんなに弱さを曝け出すことによって、自己開示し、自分の弱点や現実を大多数派に理解させることになる。ソーシャルワーカーなどによって支援してもらうことによって、一般住民が少数派に対して正の理解が進めば、大多数派が今までのようなラベリングされることが少なくなり、少数派であってもその者なりの役割や自分の方向性が自分自身に理解でき、ソーシャルワーカーなどの支援者も加えて助けになり、徐々に自分で問題解決することができるようになる。

ただ少数派の行動や思想を堰き止めているものとして社会の潮流がある。

しかしながら、適応⇔不適応の図式の中で、他方で現代社会の潮流である消費資本社会の考え方を牽引していて、アンビバレントな状況である。このもう一方の潮流は下記の（1）（2）の通りである。

（1）1）自由きまま 2）即時欲求の追求 3）個人主義であり、この思想が地域社会の中で蔓延し、誰でもこの3つを行うことが出来る自由な社会である。そこで、より問題解決を図り、ソーシャルワーカーは、生徒・児童の進路の方向性を明確化するために、児童・生徒に対し、精神⇨個人⇨家族⇨地域⇨社会の以上のようなベクトル上に派生する問題と関係性から問題点を分析し、各人にふさわしい進路をすすめるために、ソーシャル・ワーカー自身が児童・生徒の進路問題解決に向けて一緒に行動できるように、社会資源を仲介（broker）する役割もある。

（2）解決点もこのベクトル上にある。（人と環境の間に起こる）以上のようなことから解決方法としてソーシャルワーク的観点である福祉援助技術（ケースワーク・グループワーク・コミュニティワークなど）を使って進路指導を考えることが望ましいと考えられ

る。

進路指導を行う上では、児童・生徒を支援する側である教員や、ソーシャルワーカーの役割や教員の進路指導での役割をお互いに相補できるようにお互いの仕事の内容のことを理解することが望ましいことは言うまでもない（余計なお世話⇨メンターとしての寄り添い含む）。

2. 進路指導に必要な自己覚知

ではソーシャルワークで使う自己覚知は、自分は何者であるか、何が好きで何が嫌いであるか、どのような行動傾向があるか、自分の立場にたって考え、自分が中心になって考えて行くことである。また、自己覚知は、自分が自分の性格、特性、癖、考え方、好き嫌いなど鮮明に考えることでもある。自分が自分であるということを感じ、他者との価値観や考え方の相違点や同意できる点などを感じコミュニケーションしたり、ディベートのように議論して、細かく自分はどのような進路が向いているのか見極める、生徒指導の教員はどのような仕事があるのか詳細に児童・生徒に伝え、面談をする。また、「あるがままを知る・気づく、ホンネを知る・気づく」ということである。

つまりゲシュタルト療法のように容易に自分の姿を自己理解できるように導く理論と技を携えるソーシャル・ワーカーが「今、ここ」の覚知を重視しながら時間を大切にしていけることである。

例えば、「ああ！ 私は、どう進路を考えたらよいかわからない」は「覚知」であり、感情になりきっている。「自分は今、方向性と仕事を決めたかもしれない」は「洞察」であり、他人事のように自分を見つめている。つまり、「覚知」とは「感情を伴った洞察」である。

つまり相談援助は、利用者の内面に関わることが多く、援助者自身に自己の人間観や子育て観や職業観に基づく進路の方向性などの自己覚知が求められる。

進路指導は、1993年文部省「個性を生かす進路指導を目指して―生徒一人一人の夢と希望を育むために」のなかで欠如しているものが多くあり

例えば（1）中学生の将来にふさわしい夢や希望・目的の欠如（2）高等学校に進学する意義や目的の欠如（3）高等学校で打ち込めるものの欠如などが文部省であげられていたが教員だけでなく、それに対応するソーシャルワークが必要である、なぜなら多岐化

した社会で起こる問題に対する対処法は、専門性(specific)も必要であるが、一般的なかかわりである(general)な対応も並行して児童・生徒に必要である。そのバランスが取れることによって個性を生かすこともできる。

また現在の進路指導の教員は、進学に対して挑戦させ、児童・生徒の夢やこれからの未来を叶えるというよりは、教員が薦めるその学生が合格可能な学校・職場などを受験させたり、進学させたり、就職させるとするのが現実である(そのためますます生徒・児童は、指示待ち型になっている)。

そこで、悩んでいる児童・生徒に general (みんなが理解できるような)視点で考えることが重要である。現代では自己主張できない生徒・児童も少なくなくソーシャルワークを進める場合、生徒指導の教員やソーシャルワーカーが児童・生徒が主張できるように代弁者となる(advocator)。

1) インテーク(たとえば、進路を確定するか迷ったときに、何がなんだか解らなくなり、また現在の自分の能力や努力では到底解決できない状態に陥り、人の知恵や後押しをお借りする最後の指導の局面である。

問題解決できない状態では誰にも言えず、自由に自らの主張やニーズを率直に余すことなく開示できる場面である、つまりソーシャルワーカーが隣人のように接することによって、「いかに当事者自身がどうしたいかなど心に秘めていたことをワーカーに自己開示できるか?」しかしながら初回では緊張や信頼関係の構築欠如のため生徒・児童の戸惑いや不安・不信があり時として不満をもつときもある。そこで傾聴と受容の視点から生徒・児童の壁となっている問題状況をアセスメントすることによって詳細に分析し、児童・生徒に戸惑いの無い状況を良い方向性に変容させ、生徒・児童が潜在的・顕在的に持っている自分の夢や将来の方向性を示し、将来的に児童・生徒の目標や夢が達成できる進路指導が進められるようにソーシャル・ワーカーは、レポートを築きあげる必要がある。このレポートの上に成立するコミュニケーションによって、より自己と向き合い、自分に向いている進路を自らが見つけ(自己指導能力の向上)、信頼性や信憑性が決定され、安心して、将来の目標性へ向かってなにが自分に足りないかなど自己理解ともう一度対面するので

ある。(confrontation)自己不一致。矛盾、葛藤に気がつき、また、自分が気づかされたりしてらせん状に問題を解決させる、再び問題状況に当たってもう一度これの繰り返しである。問題を回避するのか、それとも真摯に問題を徹底的に解決に向かっていくかを決める(自分も嫌いと思っている自分の癖・行動パターン・先に進めない思考などと向き合う)。

アセスメントでは、ソーシャルワーカーは、児童・生徒の問題点を可能な限り分析し、解決の糸口を見つけ出す。例えば、①どのような事で進路選択に迷っているのか生徒・児童の話を傾聴②アセスメント(本人の氏名・年齢・所属先・家族構成・住所・緊急連絡先・初回面接の方法・生活歴・現在の状況などを詳しく聴く)③援助目標の設定(明確な目標どのような分野に進路を決めるか)➡短期・中期・長期などに目標を緻密に設計する④援助計画⑤事後評価に分かれる。

3. 進路指導とソーシャル・ワークによる児童・生徒への支援

今回進路指導とソーシャルワークの関係について考えようとおもったのは、近年の進路指導のなかでの児童・生徒の悩みが多様化・複雑化していることにある。それに対して隣人になって親身にはなしを聞いたり、自分の経験からアドバイスしたり、社会の潮流を集めて現在の実態を理解してもらう。

夢や将来進みたい職業に就くにはどうしたらいいか話し合いスモールステップで目標達成地点に進む。

偏差値至上主義的進路指導する側の考え方によって、児童・生徒本人の性格や今後の可能性を信じない現実主義も存在し、どうにもこうにもいかない子どもの姿が浮き彫りになった。

一旦偏差値でラベリングされると児童・生徒に進路の目標があってもその偏差値に届かないと自分の思った通りには道を進めない状況になる。

しかも仮の目標を立てていても自分の行きたかった進路方向には到達できず、不本意入学をしてしまった学生は、もともと進路に対して明確な目的を持たず、教員の勧めるままその学校に疑問を持たず失意を持って進学している場合が多い。

そのため授業・生活・地域に対して益々無力感・失意・絶望へと進み、どのように自分の方向性を再構築して、自分の希望に向けたらいいのかわからないまま

時間が経過する。また、この状況に気付かないと当事者に選択の自由が認められているのにもかかわらず、行動すらも出来ず、徐々に自己否定ややっかみなどが出現する。さまざまな肯定的なサインを社会は、児童・生徒に発信しているが自分ができない・わからないというマイナススパイラル（マイナス思考）になっているかぎり、自由度のない鎧のような自分から脱出できないのである。自己覚知が十分になされていないと、また人生の途中で同じようなことに躓く可能性を秘めている。このような中途半端場状態で夢や進んで行きたい仕事将来の夢を達成することは難しい。例え上の学校に行ったとしても勉強や生活にしっかりとした目的を持つことが出来ず、最終的に無気力で無駄な学校生活を送ってしまう者も多い。

4. 進路指導における定義とソーシャル・ワークの共働

1961 年文部省の中学校・高等学校進路指導の手引では「進路指導とは、生徒の個人資料、進路情報、啓発的经验および相談を通して生徒みずから、将来の進路の選択・計画をし、就職または進学して教師が組織的・継続的に指導・援助する課程である」、1987 年日本進路指導学会：進路指導定義委員会 10 月は「学校における進路指導は学校教育の各段階における自己と進路に関する探索的・体験的諸活動を通じて在学青少年みずから自己と職業の世界への知見を広め、進路に関する発達課題を主体的に達成する能力、態度を養いそれによって、自己の人生設計のもとに進路を選択・実現し、さらに卒業後の生活において職業的自己実現を図れるように教員が学校の教育活動全体を通じて総合的、体系的、継続的に粗動援助する課程である」。

ソーシャルワークでは、生徒・児童のネガティブ思考をポジティブ思考に変容させ、本来持っている自分の力（Strength、一個人の性格・特性・才能・技能・関心・願望・環境の力）をソーシャルワークの技術によって引き出す。その後その人の残された力（empowerment）を活用する。

また、機能と役割では（1）進路・就職をソーシャルワーカーが学校と地域などの資源に仲介する役割（2）子どもやその家族・地域に食い違いが起きたら調停役となる（3）児童・生徒の権利が守られないもしくは自らのニーズを表現できないときに児童・生徒の

代弁者となる（4）学校のみならず教育委員会、地域社会、公的な社会的サービス及びマスメディアなどの社会資源を設計する。

つまり自分自身の力で問題や課題を解決していくことができる社会的技術や能力を獲得し、自分自身の内発的動機により自分の社会的機能を向上させ、自分に反映させることである（ソーシャルワークでは、動機を進める支援を促す）。

自立（他人から離れて一人立ちすること）と自律（他からの支配や制約からはなれて自分の規範に従って独立すること）つまりそこで昔から進学したかった学校や職場に行くのに必要な勉強や能力・知恵などを事前に養うことである。キャリア形成では、ソーシャルワーカーと児童・生徒・担任教員で話し合い児童・生徒が「なりたい自分」をかかげ、それを叶えるためのプロセスを計画し、実行することである。

自分にとってやりがいのある仕事を得るためには 1) 現在の社会の潮流である仕事はなにか 2) じぶんに足りない技能・知識・資源をつくることも必要であるが、まずは自分を理解し、興味のある職業や職務の内容を知って、その職業に就くための能力（エンプロイアビリティ＝終身雇用制度の崩壊など近年の雇用環境の変化を背景に脚光を浴びるようになった概念である。技術環境や産業構造の変化に適応し、労働市場において流通価値のある能力を保持し、速やかに異動や転職ができる能力を指す。）を身につけていくことが重要である。

そこでソーシャルワーカーが進路に悩んでいる児童・生徒に対応し、問題に対するアセスメントし（ここではソーシャルワーカーと児童・生徒が向き合ってコミュニケーションし、問題解決に向けてアセスメントする経歴—経験—発展を導く。）進路に対してのアセスメントとして以下のようなことを掲げる。

- ① なりたい職業と収入
- ② 家族構成（結婚・子ども）
- ③ ライフイベント（時期・費用）
- ④ 生活費
- ⑤ 貯蓄額
- ⑥ アクシデントに備える準備
- ⑦ いきざまなどを共に考える

また、進路指導は、「生徒自らが将来の進路選択や計画を行い、就職や進学してさらに 5 年後、10 年後、

20年後の自分の人生やライフプランを適切に選択・決定できる能力を育むための指導である。

そのためには、ソーシャルワークで活用する自己覚知を十分に理解することが重要である。

つまり自己覚知とは「本当の自分を自分が探すこと自分はどこからどこへいこうとしているのか、①「本当の自分」とは一体何なのかを追求することによってなぜそこから先進めないのか、自立できないのはなぜか納得できる理由が分かり、教員やソーシャルワーカーのアドバイスや支援によってこれからの自分の進み方に確信が持て、揺らぎやブレといったものがより少なくなり、本当の自分これからの人生にソーシャルワーカーにとっても、当事者のその経験は、児童・生徒・親・近隣の人々が自己理解も進み、自己理解・他者理解ができていけば、対処の仕方や問題解決の方法やこれからの人生の組み立てがやりやすくなると思われる。

自己理解とは、いくつかの手段により「自分の気質、性格、ある種のタイプ、価値観、考え方、態度・行動など」を深く知り、それを自分自身が納得して受け止めている状態のことである。一方、自己覚知とは、「自分が見聞きしたこと、触れたこと、体験したことから感じる自分の受け止め方や反応の仕方などで自己を認識することである。」多くの場合、暗中模索の状態から活路を見出せるときに、自己理解・自己覚知が一気に進んだように感じたり、実感する。つまり「なるほど、そうだったのか」、「私は、そうしなかったのだ」、「こだわっていた理由はこれだったのか」という腑に落ちる状態をつくるときに自己理解が大切になるのである。そのためには、第三者としてソーシャルワークを活用して進路指導にも活用されることが求められる¹⁾。

5. 進路指導の方向性と段階性とソーシャルワーク

児童・生徒が自分の進路を決める際、方向性と段階性が解らないとどう動いていいか。どこに目標性を設定し向上していけばよいかわからなくなる。

そこで自分の可能性を含めた第三者からのアプローチが必要になる。

2001年「キャリア教育実践モデル地域指定事業」ではフリーター、やニートの急増・若者の早期離職・転職などに対応するためにキャリア教育を推進するた

めの事業が作られた。

(1) 進路指導は教科から全教育へ変容している。進路指導主事や進路指導部の教員だけでなく、学級やホームルーム担任教員が全員で行う。何故ならば一人ひとり指導の能力や方向性が異なるからで、より多くの教員とコミュニケーションをとることによって各々の知恵が生徒・児童に深い感銘と職業についてのそれぞれの理解を一人ひとりに伝えていくことである。

(2) 指導によって『今後の生き方・在り方』『自己指導能力の育成』などを図るための指導である。

自己実現、いかに自分の努力で図るかを考える。

例えば、望ましい人間形成を目指す目的をもった勤労体験、探索経験、職業観、人生観、様々な社会に対する理解、進路への知識などを統合し進めて行く指導を行うことである。

(3) 進路指導は、一人ひとりの発達やその段階に応じた自立できるように、そして各キャリアの課題・発達課題に取り組み、その課題を達成できるようにソーシャルワーカーがガイドラインをだしてキャリア発達を助長するように援助する計画的な教育である。

(4) 生徒の現在や将来の生活の中での自己充実・自己実現に必要な能力を育成し、態度を形成する意図的な教育である。

1) 大学生活への適応（大学生活、学習、対人関係等）、2) 大学で必要な学習技術の獲得（読み、書き、批判的思考力、調査、タイム・マネジメント）、3) 該大学への適応、4) 自己分析、5) ライフプラン・キャリアプランづくりへの導入、6) 学習目標・学習動機の獲得、7) 専門領域への導入などをキャリアで考える、8) 仕事としての進路指導と自分が適応できる夢と自分の実際を自分で育むことが重要である。

実践上の原理として、進路指導は一人ひとりの生徒の能力・適性を伸ばしていく実践活動である。

また、勤労観・職業観の育成を図る実践的活動も含まれる。

そして、生徒の主体的な方向性や意思決定能力を向上させる実践活動でもある。

進路では生徒本人の自覚・探索・探究・自分の専門性を特殊化させたり、専門性を具体化する方法や実践

的な活動が進路指導である。

- ① 一人ひとりの児童・生徒の能力・適性を伸長する実践活動である。
- ② 将来の職業生活における適応能力・態度を養う実践的活動を展開する。
- ③ 組織・運営上校内のすべて教員の共通の理解に基づき、全体的な組織・指導体制の中で進路指導が行われる。

児童・生徒の入学時より毎年・毎学年計画的・組織的・継続的に進路指導をおこなわなければならない。

教員の適切な指導・助言によって児童・生徒の自発的・自主的な活動を中心にして進路指導をすすめなければならない。

家庭学校の関係機関、地域の周辺機関、地域社会諸機関との協力・連携を中心に関係性を繋いでいく必要がある。

指導成果の確認と改善の資料を手に入れるため他の教育活動と同様評価が実施されることが重要である。この評価でもソーシャルワーカーが仲介に入って教員の成果と改善がうまくいっているかをアセスメントする。

周りの評価や注意点を知らない教員に対してソーシャルワーク的に関わる。つまり足並みを揃えられるようにまず全体像の確認と他の教員とのコンセンサスがとれているか確認し、成員がこの問題の解決に対するプロセスを理解しているかどうかを確認する。

学校教育活動を通じて一人ひとりの児童・生徒の特性や思考などを的確な判断や把握に努め、より学生が伸長を図れるように心がける。

児童・生徒が適切な各教科や科目や類別を自らの意思によって選択でき、将来の生き方、働き方を考え、ガイダンス機能を充実することによって自己実現できるようにしていく。ただ生活する上で一人では出来ないことも多いので、第三者が背中を押す程度の支援を進め、目標達成するための糸口や成功への一歩がでないときの支えになる。このような過程は、ソーシャルワーカーにもってつけの役割であると言える。

進路指導は、児童・生徒が自らの在り方・生き方をこれからどうしていくか考えることが必要である。

戦前の教育は、複線型である程度自分のいくべき方向性をきめることができたが、例えば商売や経済をやりたいかったら、中学・高校・大学と一貫して商業や経

済へと進むなど学校に個性があり、自分から進んで目的がはっきりさせ、専門の道を突き進んだ。しかしながら昭和22年4月にアメリカの教育制度にならった単線型の学校制度の導入によって、学問の得意な子も不得意な子も等しく同じカリキュラムで勉強を強制する6-3-3制によって、すべての子どもが同じ能力を持つとの前提条件に立つようになった。

一方消費資本社会は自由気ままがゆるされ、ほしいものはほしいまま、自分は自分、人は人という個人主義が台頭した。つまり学校としては縛りをきつくしたが、一方社会の潮流は自由にあふれかえった。このギャップが優秀で社会の流れを理解しているものはより生活しやすく、あたかも一生を保障するかのように流れている。

国立教育政策研究所生徒指導研究センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進」では以下のよう能力が必要であることが述べられている。

- i) 人間形成能力 ➡ 他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組むことである（自分と他者理解の向上と社会潮流理解を進める）。
- ii) 情報活用能力 ➡ 学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす。
- iii) 将来設計能力 ➡ 夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。
- iv) 意思決定能力 ➡ 自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。

いわゆる「職業観・勤労観」推進するためには自分だけでなく、もっと広域に他者との関係すすめる能力発達段階に応じた課題と自分が人のために生きようとする必要がある、また、グローバリゼーションの社会の中で自分の進路や将来を学ぶことや働くことの役割や意味を社会生活を通して理解していく。またボランティアやアルバイトなどを通じて前段階の働く・生活することの意義や役割、働き方の多様性と独自性に対して、自分への適正や適応の仕方を学んだり考えたりする。この経過は、ソーシャルワークの基本的特性である。

児童・生徒への見守りをしていくことによって、ワーカーの技を使うことによってお互いに成長を促すものである（相補関係）。

終わりに

現代を生きぬくということ ― 歪曲化社会の生き方

現代社会での行動は、昔のいきたや文化の伝承だけで対応しようとしてもうまく現代社会を生きぬいていくことができない。なぜならば、社会自体が進化しているので、人間もその進化に気付き、流に負けないように一緒にその変化の理解や社会に適応する行動をしていくことが必要になる。同時に他の物まねではなく、自分らしさを創造していくことが大切である。

現代社会の自由では、規範をまもらねばならない共同と個人の自由というアンビバレントな概念に翻弄される危うさも兼ね備えている。

一生善性で生き抜くということは、このグローバルな社会では容易なものではない。

やはり真っ直ぐ立っているつもりでも本当は専門家などによって指摘されることによって、相当歪んでいることが解ることがある。その解決者がコーディネーターだったり専門家だったり、アドバイザーだったりする。

例えば、「個人主義の時代である」というところでも多数派理論によって個性化は、一旦トレンドになったとしてもファッションと同様に『のど元過ぎれば熱さ忘れる』である。つまりいつかはかき消されるのがおちである。時代はこれを繰り返して進化を続けている。

つまり我々が考えなければならないのは、「これと決めたら弱音を吐かないであきらめないで集中して、前に進んで行くことである。」そうすれば必ず何らかの夢が叶うのであるいつもついていないと思っている人も多いが1回もついていないひとは殆どいない。

悪い時ばかりではなく、あきらめないで努力していれば道は開けるのである。

一人ひとりが道先案内人になって闇夜をてらしていくことこそが、人間社会に求められることである。産まれてから死ぬまでどれだけ自分のためだけでなく、社会のために役に立っているか、次世代の人々にこの地球を残せるかを考え実行することが我々の使命である。

そうは言うものの、さまざまな悪意が善性の行動を止めてしまうこともしばしばである。

例えば、人に善意を伝えようとしても価値観の相違から自分の本意が他者に伝わらず、伝言ゲームのように、外部の雑音に自分の本来持っている心の声が打ち消されることも多い。

もっと言えば、人間は変わらないという人たちも多くいるが、「ではなぜ産業や医療や文化までもがこれほど変化しているのだろうか」現代社会では、アセッションして進化している人々が多くいるのである。人には持ち場、持ち場があり、適正があるかどうか重要である。昔の時代はすぎだろうと嫌いだろうと丁稚的に体に覚えさせる形式であったが、第1次第2次産業がすたれている現代は、それを応用するかサービスを売るという仕事に就く確率が高い。

パラレルに物事が動かない社会では、みんな平等という定義では動かない人間関係や社会組織の部分が多数ある。そこで現代型モデルに適合したコミュニケーションや共同に人間すべてが行きつく先を考えて行く必要がある。

現代型の努力・忍耐・集中力も求められる。

例えば

- (1) 競争社会に蔓延る受験戦争、これはそのラインに乗っている以上、他のものと戦い続けなければならない。だから競争社会では、ひとをはねのけても、のしあがるが必要になる場合もある。
- (2) 自分でよかれと思ってしたことが、他者には、余計なお世話になりやすい。ここでは自分の今までの生活史があり、それに従って行動し優しくされたり、自分で強く生きていかねばならない状態が強かったとき、今まで人に甘える経験をしていないために、突然人に甘えるという行為は自分に合わず、その好意を受け取れず自分にバリアを張る傾向があると思われる。
- (3) 監視社会の中では、自分のプライバシーが損なわれ、うまくその地域の中で生活することが難しくなる。
- (4) 個人と家族と地域と社会の繋がりが昔よりも複雑化し、自分ではどこにたっているのか、どこに向かおうとしているのか理解に苦しむことも多い。
- (5) 一方、人間は進化し続けていて物事を進化させつづけている。

(6) つまりこの社会を生き抜くには強い生命力と集中力と自分の進むべき方向性の希望と努力の継続が必要である。

(7) 災害のとき、しぶとく生きる知恵を持つー サバイバルの時代である。

生きるとは生かされていることも同時に示している。

もっとなんのために生かされているのか。自分の勝手で生きるのではなく他者との共同で行動し、いかに気づきを増やしていくかを考えて行動する時代をむかえている。

以上のようなことから自分勝手にいきるのではなく、人を活かすことが自分を活かすことであることを確認しながら将来の生きる力を高めていってもらいたいと思う。

註

- 1) ユーズドバイザー養成講座
http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/h19-2/html/5_1_2.html

参考・引用文献

- 秋山博介 (2005) 「不登校についての一考察ー ラベリングに焦点をあててー」 実践女子大学生生活科学部紀要第 42 号 pp39-48.
- 秋山博介 (2007) 「不登校についての一考察その 2ー 学校教育とひきこもり、フリーター、ニートとの関係」 実践女子大学生生活科学部紀要第 44 号 pp.1-14.
- 秋山博介 (2008) 「不登校に関する研究ー心理・社会的視点からの考察」 実践女子学園学術・教育研究 叢書 18 弘文堂
- 秋山博介 (2009) 「スクールソーシャルワークの今後と課題」 実践女子大学生生活科学部紀要第 46 号 pp.29-41.
- 秋山博介 (2012) 「社会的不適応を続ける青年女子の症例についてー ソーシャルワークに有力な技と考える認知行動療法を適用して」 実践女子大学生生活科学部紀要第 49 号 pp.45-52.
- 尾木和英 (2005) 「自己指導力・社会性を育てる生徒指導の PDCA」 学校の PDCA シリーズ NO.2 教育開発研究所
- 加澤恒雄・広岡義之編著 (2007) 「新しい生徒指導・進路指導ー 理論と実践」 ミネルヴァ書房
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002) 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進」
<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/1hobun.pdf>
- スクールソーシャルワーカーの活動実践事例
http://www1.iwate-ed.jp/tantou/joho/text/h19/h19_127ca.pdf
- 岩手県総合教育センター平成 19 年度 10 年教員研修講座
保育士養成講座編集委員会編 (2009) 「家族援助論」 社会福祉法人全国社会福祉協議会 107p
- フランス・J ターナー編著米本秀仁監訳 (2006) 「ソーシャルワーク・トリートメント上・下」 中央法規出版
- 文部省 1987 「生徒指導における性に関する指導ー中学校・高等学校編」
- 諸富祥彦 (2012) 「カウンセラー、心理療法家のためのスピリチュアル・カウセリング入門理論編」
- 柳沢孝主責任編集 (2008) 「臨床に必要な人間関係学」 弘文堂